

2007年 伊藤敦紘

卒業論文要旨 「14歳の母」現象と近年の「少子化」をめぐる議論—  
日本における出産と中絶観の変遷における考察をふまえて—

最近、若者の性について語られることが多くなった。現在の性教育の問題・若年での出産の問題などいろいろな番組や記事で取り上げられている。私も最近、若者の性の問題についての番組を見た。それは、昨年放映された、「14才の母」というテレビ番組である。内容は、主人公が14才にして、たった1度性交渉をし、妊娠し、子どもを出産するという話である。私は、このドラマを見て産むべきと思った。それは、産む女性が産みたいと願っているからだ。しかし、番組内HPや放送後に新聞などで、「産むべきではない」「ありえない」といった意見があった。このことから、私自身の主観的な思いを客観的に見る必要があると思い、研究をすることにしたのである。そこで、私は論文の目的を、現在の出産と中絶観はどのようなものなのかを明らかにすることとした。

第1章では、およそ25年前に放送された、第1シリーズ「3年B組金八先生」と「14才の母」とを対比することで、時代の変化とともに変わってきた、出産と中絶観について考察を行った。また「出産」の奨励という面だけを取り上げると、「14才の母」と同時代的な問題「少子化」対策が共通していることが見出せるので、「少子化」と「14才の母」がどのような関係があるのか考察を行った。

第2章では、現在の出産と中絶観はどのようなものなのかを歴史的に明らかにするために、出産と中絶に関する歴史の変遷を検討した。まず、「前近代」と「近代～現代」についての出産と中絶について、歴史の変遷を考察した。さらに、私が昨年に行った、「静岡大学の学生（工学部と情報学部）が考える出産に関する意識調査」を紹介し、考察を行った。

第3章では、第1章と第2章の考察を再検討した結果、以下のような結論に至った。

前近代から近代そして現代に至る過程で、日本における出産と中絶のあり方は、社会的な階層や居住地域による文化の違いなどはあれ、共同体（コミュニティ）の中の個人としてのそれから、近代的な組織（アソシエーション）である家族の中の個人としてのそれ、そして個人主義化の傾向が強まっていると考えられる。

しかしながら、出産は、「14才の母」で強調される様に、プライベートな問題でありながらも、「少子化」対策にみられるように、日本では「社会＝国家」的な問題とされており、必ずしも個人的な問題ではなくなっているといえる。しかもこの過程は金八先生の時代よりも見えなくされているといえる。